

最高学部

ネパールワークキャンプ（事前調査活動）

神 明久

1990 年から続けてきた植林活動だが、2020 年から 3 年間、コロナ感染症拡大による活動休止を余儀なくされた。情勢は落ち着いたが、活動を現地でサポートしていた方が亡くなるなど、活動休止中に現地の状況も変化した。このため、ワークキャンプを学生の教育活動の一環として再開する前に学校業務として教員が現地の状況を確認することにした。このため、今年度の活動は、ワークキャンプとしての活動の回数には数えない。

1. 活動期間と参加者

2023 年度は、8 月 20 日から 30 日までの 10 日間現地に入り、2024 年度のワークの活動準備と実施予定の樹木調査に関する前調査を行った。参加者は、教員 3 名（神、小田幸子、夏井正明）に加え、学部 3 年生の二宮新で、今回は教育的活動というよりは、学校業務として次年度に向けての調査を行い、これに学生が同行するという形となった。

2. 現地での活動概要

現地では、5 か所の植林地のうち、ジャレスワールとバカデガラについては現状の確認を行った。2019 年に訪問した時とあまり変化は見られなかったが、バカデガラは村人による森の利用が行われていない印象を受けた。一方、ジャレスワールは林内が少し整備され人の往来もあり利用されている印象を受けた。また、残りの 3 つの植林地のうち、最も我々の宿舎に近いゴサイクンダでは、プロット 1, 2, 3 とプロット A～E について確認を行い、一部に関しては樹木に関する調査も行った。生育状態は、まったく活着していないところと、かなり大きく成長したものがあつた。

一方、国としてのシステムに変更があつたとの情報があり、森林を取り巻く状況について、現地で聞き取り調査を行った。具体的には、地区営林署署長や村の森林利用グループから直接話を聞いた。聞き取り調査の結果、燃料が薪からガスへ変化したことにより森林を利用することのメリットが減少したため、管理する村人が森のメリットを実感しやすい仕組みづくりが進められていた。具体的には、より収益性の高い植物を植えたり、森でアクティビティを行える工夫をすることで、利用料を得るなどがあり、村ごとにいくつかの試みが行われていた。

3. まとめ

このような状況を鑑み、来年度(2024 年度)は 35 年間(コロナでのギャップを含む)のまとめの年とし、調査やイベントを行い、加えて新しい活動地域の検討を行う年とすることになった。